

『六十種曲』の日本における所藏と流通について

—早稲田大學所藏テキストの調査を中心に—

伴 俊 典

○、はじめに

『六十種曲』⁽¹⁾は明末の刻書家毛晉が汲古閣から刊行した、明代傳奇の選集である。明代傳奇の選集として最大であるばかりでなく、近代的な出版が行われる以前の中國戲曲の選集としても最大の規模を誇る。

『六十種曲』は出版された當時から非常に廣く廣まり、清代に至つても様々な書肆から刊行が續けられ、著名な藏書家の目錄には必ずこの著録が見られるほどであった。

ただ『六十種曲』は、版刻を重ねるに従つて、誤刻やいい加減な補修が増え、通行するテキストの信頼を失わしめ、結果として、著名な選集として廣まれば廣まるほど信頼のおけるテキストが失われる狀況を招いた。現在、缺落の無い完本

の『六十種曲』初印本は佚して傳わらず、零本として流通している各戲曲から初印本を探し出し、テキストを復元すること⁽²⁾で、初めて信頼のおけるテキストを見ることが可能である。

また、多くの戲曲小説が舶載され日本に至つた例に漏れず、『六十種曲』は、江戸時代に日本に輸入された。ただ早くから輸入された記録があるにもかかわらず、その受容から與えた影響に到るまで、不明な部分が多い。これは日本に輸入された『六十種曲』の數量が少なかつたこと、『六十種曲』の各テキストが整理されていないこと、『六十種曲』の研究がそもそも排印本を起點としていることなど、多くの要因が、日本における『六十種曲』の研究を阻害していたことに起因する。日本においても『六十種曲』は信頼できるテキストが讀者の間から失われていたが、その弊害は中國より更に甚だしかつ

た。

現在、早稲田大学には、中央図書館、坪内博士記念演劇博物館に、各一本ずつ、刊行者不明の『六十種曲』が所蔵され、また明刊の傳奇を多數所蔵している。小論は日本に所蔵される主な『六十種曲』テキストを整理すると共に、今まで不明だった早稲田大学所蔵の『六十種曲』と、明刊の傳奇について検討を行う。特に各テキストの散逸と個別の流通に注目し、『六十種曲』が散逸しつつ廣く流通したことから、日本の戯曲文化に與えた影響、意義との關係を比較、考察する。

一、『六十種曲』の初印本と通行本

『六十種曲』は、傳奇が發展を遂げた明の嘉靖を経て、様々な作品を刊行するようになった明末の崇禎年間（一六二八年～一六四四年）に刊行された。

編者の毛晉（一五九九年～一六四九年。初名鳳苞。字子晉、子九。號潛在、汲古閣主人、等）は江蘇常熟の著名な藏書家であり、刻書家であった。現在『六十種曲』として廣く知られるこの戯曲の選集は、當初、『繡刻演劇十本』という名で、十本の傳奇を一冊として第六套まで出版された。所收の戯曲は、孤本を除いて、現行のいかなる版ともテキストが異なっており、

『六十種曲』の日本における所蔵と流通について（伴）

『繡刻演劇十本』に編入される際、毛晉によって校訂がなされていたことが分かっている。その際、第二套初印本に付された「題演劇二套」に「偕二、三同士、就竹林花樹、携尊酒、引清謳、復捻合會眞以下十劇……（二、三の同士と共に、竹林花樹のもとで、樽酒を携え、爽やかな歌聲を聞き、再び『會眞記』以下の十本の劇を綴り合わせた）」とある通り、その校訂が交遊のある數人と共に行ったものであった³⁾。

『繡刻演劇十本』の出版は、六套六十本を刊行したところで新たな刊行が已み、その後清の康熙年間（一六六二年～一七二二年）に「六十種曲」と題する封面と「六十種曲總目錄」とを付して、第一套から第六套を合して、改めて『六十種曲』として印行された。これ以降、複数の書肆が、清から民國にかけて、汲古閣の版木を補修しながら幾度も『六十種曲』を印行したが、その體例は全てこの際の編集に基づいている。

通行本の『六十種曲』は、六十種の戯曲を「子集」～「亥集」に五冊ごと全十二套に分けて整理しているが、『繡刻演劇十本』として刊行されていた當初はこうした分類はなされていなかった。『六十種曲』として印行された際、封面や名稱だけでなく、全體的な改編が加えられたものである。

一九五〇年代から八十年代にかけて、鄭振鐸や吳曉鈴等が、

中國の藏書機關と藏書家が有する汲古閣初印本の零本を調査し、全ての初印本を確認した。⁽⁴⁾それによると、初印本のテキストは、現在通行する『六十種曲』の隨所に見える誤字誤刻もない、非常に整ったテキストであつたらしい。また初印本に付された「繡刻演劇十本」の封面は、現在通行する『六十種曲』に付される「繡刻演劇十本」封面と異なつていて、そこに書かれた収録戯曲の名目を比較すると、初印本と通行本とは、異なる順序で戯曲を収録していたことが分かる。以下に初印本の編次と通行本の編次を掲げる。⁽⁵⁾

表の左が初印本の編次で、右が通行本の編次である。(括弧内の算用數字は初印本と通行本の間の對應を示す。)

通行本の間では、補修の程度の差はあるが、基本的な編次は同一である。

表中の戯曲の排列によつて初印本と通行本の間の変動を確認すると、第一から十本、第三十一から四十本、第五十一から六十本の間で相互に異同が見られ、初印本と通行本とは、十本ごとに編集を改めていることが分かる。

初印本が収録する順序を見ると、基本的に、古い時代から新しい時代へ作品を配して、編集の方針を窺うことが出来るが、通行本が収録する順序を見ても、なぜこのような順

序にしたか、確たる理由を見つけれない。初印本よりは著名な作品が平均的に収録されていると感じるのみである。

また『明代傳奇全目』「引用書籍解題」によると、原刻初印本は各傳奇の前に必ず封面を持ち、版式、行款、字體は非常に整い、頁數に殘缺、顛倒といった缺點は無い、としていて、現在の『六十種曲』が有するテキスト上の諸問題が通行本以降に現れたものだとして確認される。⁽⁶⁾

『六十種曲』は刊行後廣く受け入れられ、版木を補いつつ、實獲齋、同德堂等復數の書肆がたびたび刊行している。現在確認されている『六十種曲』の版本は以下の通りである。

明 崇禎年間 繡刻演劇十本 第一套、第六套
清 (順治刊本 六十種曲 百二十冊 毛晉汲古閣)

康熙刊本 六十種曲 百二十冊 汲古閣訂正、本衙藏板

康熙補刻本 六十種曲 百二十冊 實獲齋藏板
道光乙巳(二十五年、一八四五年)補刻本 六十種曲 同德堂藏板

民國 (成都存古書局一九一九年刻本 六十種曲 存古書局)

(一) 内は小論において調査できなかったテキスト。いずれも『六十種曲標注』序——六十種曲的編刻與流傳⁽⁸⁾による。

表一 『六十種曲』初印本（左）と通行本（右）の編次

六十種曲初印本		六十種曲通行本	
01	琵琶記 元・高明（→10）	01	雙珠記 明・沈鯨（→58）
02	荊釵記 明・柯丹邱（→06）	02	尋親記 明・無名氏（→05）
03	香囊記 明・邵璨（→58）	03	東郭記 明・孫鍾齡（→56）
04	浣紗記 明・梁辰魚（→09）	04	金雀記 明・無名氏（→39）
05	尋親記 明・范受益（→02）	05	焚香記 明・王玉峯（→34）（子集）
06	千金記 明・潘采（→51）	06	荊釵記 明・朱權（→01）
07	精忠記 明・姚茂良（→08）	07	霞箋記 明・無名氏（→35）
08	鳴鳳記 明・王世貞（→33）	08	精忠記 明・姚茂良（→07）
09	八義記 明・徐元著（→36）	09	浣紗記 明・梁辰魚（→04）
10	三元記 明・潘受先（→31）	10	琵琶記 元・高明（→01）（丑集）
11	（南）西廂記 明・崔時佩、李景雲	11	（南）西廂記 明・崔時佩、李景雲
12	幽閨記 元・施惠	12	幽閨記 元・施惠
13	明珠記 明・陸采	13	明珠記 明・陸采
14	玉簪記 明・高濂	14	玉簪記 明・高濂
15	紅拂記 明・張鳳翼	15	紅拂記 明・張鳳翼（寅集）
16	還魂記 明・湯顯祖	16	還魂記 明・湯顯祖
17	紫釵記 明・湯顯祖	17	紫釵記 明・湯顯祖
18	邯鄲記 明・湯顯祖	18	邯鄲記 明・湯顯祖
19	南柯記 明・湯顯祖	19	南柯記 明・湯顯祖
20	（北）西廂記 元・王德信	20	（北）西廂記 元・王德信（卯集）
21	春燕記 明・汪鋈	21	春燕記 明・汪鋈
22	琴心記 明・孫柚	22	琴心記 明・孫柚
23	玉鏡臺記 明・朱鼎	23	玉鏡臺記 明・朱鼎
24	懷香記 明・陸采	24	懷香記 明・陸采
25	綵毫記 明・屠隆	25	綵毫記 明・屠隆（辰集）
26	運甓記 明・吾邱瑞	26	運甓記 明・吾邱瑞
27	鸞鏡記 明・葉憲祖	27	鸞鏡記 明・葉憲祖
28	玉合記 明・梅鼎祚	28	玉合記 明・梅鼎祚
29	金蓮記 明・陳汝元	29	金蓮記 明・陳汝元
30	四喜記 明・謝讜	30	四喜記 明・謝讜（巳集）
31	繡襦記 明・徐霖（→39）	31	三元記 明・沈受先（→10）

『六十種曲』の日本における所蔵と流通について（件）

32 青衫記 明·顧大典 (→ 40)	32 投梭記 明·徐復祚 (→ 37)
33 紅梨記 明·徐復祚 (→ 35)	33 鳴鳳記 明·王世貞 (→ 08)
34 焚香記 明·王玉峯 (→ 05)	34 飛丸記 明·張景 (→ 55)
35 霞箋記 明·無名氏 (→ 07)	35 紅梨記 明·徐復祚 (→ 35) (午集)
36 西樓記 明·袁於令 (→ 37)	36 八義記 明·徐元 (→ 09)
37 投梭記 明·徐復祚 (→ 32)	37 西樓記 明·袁于令 (→ 36)
38 玉環記 明·楊柔勝 (→ 53)	38 牡丹亭 明·湯顯祖明·碩圓刪定 (→ 60)
39 金雀記 明·無名氏 (→ 04)	39 繡襦記 明·徐霖 (→ 31)
40 贈書記 明·無名氏 (→ 55)	40 青衫記 明·顧大典 (→ 32) (未集)
41 錦箋記 明·周履靖	41 錦箋記 明·周履靖
42 蕉帕記 明·單本	42 蕉帕記 明·單本
43 紫簫記 明·湯顯祖	43 紫繡記 明·湯顯祖
44 水滸記 明·許自昌	44 水滸記 明·許自昌
45 玉玦記 明·鄭若庸	45 玉玦記 明·鄭若庸 (申集)
46 灌園記 明·張鳳翼	46 灌園記 明·張鳳翼
47 種玉記 明·汪廷訥	47 種玉記 明·汪廷訥
48 雙烈記 明·張四維	48 雙烈記 明·張四維
49 獅吼記 明·汪廷訥	49 獅吼記 明·汪廷訥
50 義俠記 明·沈璟	50 義俠記 明·沈璟 (酉集)
51 白兔記 明·無名氏 (→ 57)	51 千金記 明·沈采 (→ 06)
52 殺狗記 明·徐崐	52 殺狗記 明·徐崐
53 曇花記 明·屠隆 (→ 56)	53 玉環記 明·楊柔勝 (→ 38)
54 龍膏記 明·楊珽	54 龍膏記 明·楊珽
55 飛丸記 明·張景 (→ 34)	55 贈書記 明·無名氏 (→ 40) (戌集)
56 東郭記 明·孫鐘齡 (→ 03)	56 曇花記 明·屠隆 (→ 53)
57 節俠記 明·許三階 (→ 60)	57 白兔記 元·無名氏 (→ 51)
58 雙珠記 明·潘鯨 (→ 01)	58 香囊記 明·邵璨 (→ 03)
59 四賢記 明·無名氏	59 四賢記 明·無名氏
60 牡丹亭 明·湯顯祖明·碩圓刪定 (→ 38)	60 節俠記 明·無名氏 (→ 57) (亥集)

これらのテキストは、印行の先後について上記の如く明らかになっているが、テキスト間の比較は詳しくなされてない。小論では日本所蔵の各『六十種曲』テキストによって特徴を確認する。

二、日本所蔵の『六十種曲』

現在日本には『六十種曲』のテキストが多数所蔵されているが、小論ではそのうち十本を確認した。そのうち初印本を含むと判断できるものは、宮内廳書陵部に藏される『傳奇四十種』と稱する特殊な戯曲の選集のみで、これを除き全て通行本である。またそれらも東京大學総合圖書館が所蔵する汲古閣訂正刊とされるテキストを除き、全て汲古閣本ではなく、最も流通した實獲齋本以降の後修本である。その中で注目すべきテキスト八本を挙げ、検討を試みる。

日本に『六十種曲』が傳來した年代の確定できる最も古い記録は、江戸時代、清の貿易船が南京より長崎に舶載した貨物中の書籍で、元祿十四年（一七〇一年）である⁹⁾。しかしその現物は現在佚して傳わらない。

現物を確認できるものとしては、周防徳山藩第三代當主毛利元次（寛文七年（一六六八年）〜享保四年（一七一九年））舊藏

『六十種曲』の日本における所蔵と流通について（件）

『傳奇四十種』が最も古い。現在宮内廳書陵部に藏されるこのテキストは、長澤規矩也による書誌調査等¹⁰⁾によると、貿易商が商賣のため『六十種曲』残三十三種に墨憨齋定本傳奇四種、明刊本の傳奇三種を足し、書名をでっち上げて作った物であり、書肆が正式に版刻したものではない。テキストを調査したところ、三十三種のうち『紅梨記』、『紫簫記』、『義俠記』を除く三十種に「繡刻〇〇記定本」とする封面を持ち、版面の比較においても、缺丁はあるが、通行本に見られる誤字や頁の顛倒が無く、汲古閣初印本と判断される。『六十種曲』の初印本に收められたテキストが日本に輸入されたものとして良いだろう。

しかし江戸期の書籍流通資料に『六十種曲』に關わる名前が見られるのは、この二種だけであり、江戸期に『六十種曲』のテキストが輸入されたのはかなり少数だったと言える。『六十種曲』の流通が極めて少数であったことは、明治初期に中國戯曲研究が始められた當初、その一翼を擔った久保天隨が『六十種曲』を入手することが困難であったと説くこと¹¹⁾や、また『めざまし草』に連載された「評新領異録」第三回『水滸傳』合評¹²⁾において森槐南が『水滸傳』戯曲化作品として『六十種曲』所收『水滸記』を挙げるが未見であると但し書きを

加えていることから窺える。一九三五年に開明書局による排印本が出版されるまで、日本において、『六十種曲』は、専門家の間でも見る機會の得られない資料であった。

しかし中國からの古書が古籍商を通じて大量に輸入されると、それなりの量の『六十種曲』が輸入されたようで、現在、研究機關に所藏される『六十種曲』のうち、信賴できるテキストは、大正から昭和初期にかけてのものが多し。主要な研究機關の藏する『六十種曲』の著録を以下に掲げる。

- 一 六十種曲十二集 卽繡刻演劇十本第一套至第六套 附萬全記二卷 卽富貴仙 明毛晉輯 明末常熟毛晉汲古閣刊 清修本 一〇〇冊 東京大學總合圖書館
- 二 六十種曲 明毛晉輯 常熟毛氏汲古閣 刊本 實獲齋藏板 一二〇冊 京都大學人文科學研究所
- 三 六十種曲 明毛晉輯 常熟毛氏汲古閣 刊本 實獲齋藏板 一二〇冊 京都大學文學研究科圖書室
- 四 六十種曲 明毛晉編 常熟毛氏汲古閣 刊本 本衙藏版 一二〇冊 大阪府立中之島圖書館
- 五 六十種曲 明毛晉輯 汲古閣 訂正刊 一二〇冊 (合六〇冊) 國立國會圖書館
- 六 六十種曲 明毛晉輯 道光二十五年刊 同德堂藏板 一二〇冊

○冊 國立國會圖書館

- 七 六十種曲 卽繡刻演劇十本 明毛晉編 汲古閣 明崇禎刊 清道光二十五年修 六一冊 十帙 東京都立中央圖書館市村文庫
- 八 六十種曲 明毛晉編 道光二十五年刊 本一二〇冊 東京大學圖書館

結論から言うと、ここに挙げた『六十種曲』はすべて何らかの補修を経たものであり、幾つかのテキストについては刊記を改める必要があることが分かった。以下にこれらが上述の版本のいずれに屬するか調査した結果を記すが、紙幅の都合ですべての調査結果を記すことが出来ず、印行の先後に従い状況を概述する。

この中で最も印行が早く、通行本の本来の面目を最も残すものが一、東京大學總合圖書館所藏本(東大本)である。

このテキストは『雙珠記』巻首に封面「汲古閣訂正／六十首曲／本衙藏版／江南省狀／元境内三／多齋王氏／書林發兌」(卽「六十首曲封面」、次封面「繡刻演劇十本／第一套／雙珠尋親 東郭 金雀／焚香 荊釵 霞箋 精忠／浣紗 琵琶」(卽「繡刻演劇第一套封面」、次「演劇首套弁語」、次「六十種曲總目」を有す。『春燕記』巻首に封面「繡刻演劇十本／第三

套／春燕宋玉 琴心相如 玉鏡溫嶠 懷香韓壽／綵毫李白 運
 甕陶侃 鸞鏡杜恙 玉合韓翊／金蓮蘇軾 四喜宋郊（即「繡刻
 演劇第三套封面」）、次「題演劇三套弁語」を有す。「錦箋記」卷
 首に封面「繡刻演劇十本／第五套／錦箋 蕉帕 紫繡 水滸
 ／玉玦 灌園 種玉 雙烈／獅吼 義俠」（即「繡刻演劇第五套
 封面」）、次「題演劇五套弁語」を有す。「千金記」卷首に封面
 「繡刻演劇十本／第六套／千金 殺狗 玉環 龍膏 贈書 曇
 花 白兔 香囊 四賢 節俠」を有す。

またこのテキストは『白兔記』（通行本『六十種曲』亥集第二
 （全體の五十七番目））巻首に「繡刻演劇十本／第六套／白兔
 殺狗 曇花 龍膏 飛丸 東郭 節俠 雙珠／四賢 牡丹」
 とする封面を有する。これは上掲『六十種曲』初印本の第六
 套の編次と同じ（『白兔記』は初印本では第五十一番目）で、初
 印本の封面がそのまま残った貴重な資料である。また「繡刻
 演劇十本第二套」封面及び「繡刻演劇十本第四套」封面を缺
 く点からも、これが實獲齋本の出版前の印行である可能性が
 高い。現存する通行本の第二套の封面は、全て封面左下角に
 「實獲齋藏板」と刻され（『南』西廂記）（初印本、通行本共に第
 十一番目）の首に配されている。恐らく汲古閣本の出版から實
 獲齋本の出版までに本来の封面が失われ、實獲齋本出版の際

『六十種曲』の日本における所藏と流通について（件）

に改めて作られたもので、これを持たないことが、却って印
 行が古い證據の一つとなる。出版者の三多齋は主に清朝に活
 動した書肆¹³であるが、このテキストは補刻などもそれほど多
 くなく、封面に「汲古閣訂正」とする通り、汲古閣本の面目
 を最も残すものだろう。

次に實獲齋本に屬するテキストが挙げられる。上掲のテキ
 ストの中で二、京都大學人文科學研究所藏本（人文研本）、
 三、京都大學文學研究所藏本（京大本）、四、大阪府立中之
 島圖書館所藏本（中之島本）である。中之島本については同館
 大阪資料・古典籍室（三階）に設置されているカード目録等
 によれば本衙藏版とするが、實物を調査したところ實獲齋藏
 板の後修本だった。『南西廂記』巻首に「繡刻演劇十本第二套」
 を有し、その封面左下角に「實獲齋藏板」とあるため、明ら
 かに實獲齋本であり、また『還魂記』卷上「目次」を補刻し
 ている（本来は「目錄」に作る）からその補刻本であろう。

人文研本、京大本は、共に實獲齋本であるが、實物を調査
 したところ雙方補修の跡を残す。『六十種曲』には巻首題を單
 行とするものと雙行のものとするものが混在している（これ
 は初印本が刻された當初からそうであった）が、實獲齋本の單行、
 雙行の混在は初印本より更に錯綜するため一目で分かる。例

えば『還魂記』は京大文研本では卷上巻首題を單行とし卷下巻首題を雙行とするが、人文研本では上下巻共に雙行とする。一方『牡丹亭』（目錄等には「還魂記」と記す）では卷上巻首題を雙行とし卷下巻首題を單行とするが、人文研本では上下巻共に單行とする。一見すれば『還魂記』と、『牡丹亭』とについて、京大本で上下巻を取り違えて配したように見られるが、内容を見ると京大本が正しく繋がり、人文研本が補修したものであることが分かる。しかし京大本は『還魂記』上下巻の目錄を「目錄」とし、『牡丹亭』卷上の目錄を「目次」とし卷下を「目錄」とするが、人文研本では『還魂記』、『牡丹亭』共に目錄を「目錄」に作るなど、京大本の方が補修した痕跡も確認でき、相互に補修の跡が見られる。

その他の六、國立國會圖書館所藏本（國會本）、七、東京都立中央圖書館所藏本（都立中央本）、八、東北大學附屬圖書館所藏本は、すべて實獲齋本より更に後の印行になる同徳堂本に補修を加えたものである。この中で、東北大學付屬圖書館藏本（東北大本）が最も本來の面目に近い。元々同徳堂本は實獲齋本にも増して誤字誤刻が多いが、東北大本が最も版面の混亂が甚だしいからである。

東北大學圖書館藏の道光二十五年刊本『六十種曲』は、『東

北大學所藏和漢書古典分類目錄』に刊記こそないものの、『雙珠記』巻首に「道光乙巳（二十五年、一八四五年）季重修／六十種曲／同徳堂藏版」とする封面を持つ同徳堂本系統の後修本である。編次は大體國會本、都立中央本の同徳堂本と同じく第二套巻首に實獲齋藏版とする「繡刻演劇十本第二套」封面を持ち第四套に封面を持たない。

この版が特徴的なのは、國會本等他の同徳堂本が脱誤の多くを異版によつて補っているのに對し、綴じ間違いや缺卷、缺葉を一々朱字によつて示している點である。これは同徳堂刊本からの變更が少なく、その間違いを留めたままであると推測される。示された間違いをまとめると以下の通り。

- (一) 綴じ間違い（『東郭記』、『荊釵記』、『精忠記』、『浣紗記』等）
- (二) 缺葉（『荊釵記』、『明珠記』、『南柯記』、『西廂記』等）
- (三) 版刻上の相違（『浣紗記』巻下十五葉の上部に下十六葉下部の版木を接いで印刷し、巻下十六葉上部に巻下十五葉下部を接いで印刷する）、（『西廂記』巻上目錄の框格を短く作る（十七センチ。他版は十九センチ））、（『幽閨記』版心丁數の數字がでたらめ）、（『紫釵記』版心丁數の數字がでたらめ）、（『香囊記』巻下第一葉上部に第二葉下部を接いで印刷し、巻下第二葉上部に第一葉下部を接いで印刷する）等。

實物を見ると、東北大本には殆ど全巻に何らかの錯誤が見え、綴じ間違いにしても、版心の丁数の数字自體が間違っているため、容易に整理もできない。『六十種曲』が版刻を重ねる度、粗悪な編集によつて、テキストの信頼を失つていった結果が、東北大本に如實に表れている。

そして五、國會圖書館藏『六十種曲』汲古閣訂正刊本は、『國立國會圖書館漢籍分類目錄』に「汲古閣訂正刊」とあるが、第二套封面に「實獲齋藏板」とする「繡刻演劇十本第二套」の封面を持ち、また『四喜記』第一葉を補刻している。これは明らかに實獲齋本以降の版が有する特徴である。更に『澆紗記』十五葉と十六葉の版木上下を入れ違え印刷している點、『還魂記』の二十頁代の丁数を「廿〇」とする點などは同徳堂本以降の版が持つ特徴である。ではこれが同徳堂本かと言うと、「同徳堂藏版」とする「六十種曲」封面を持たず「汲古閣訂正刊」とする「六十種曲」の封面を有する點、『水滸記』卷九に版木の缺けが無い點は、初印本にのみ残る特徴であるため、そうとも言い切れない。こうした場合汲古閣訂正刊本に通行本を補配した可能性を考えるが、汲古閣訂正刊本に繋がる特徴が上掲の二カ所しかなく、むしろ實獲齋以降の版に「汲古閣訂正刊」とする封面等を補つたとした方が適當である。

『六十種曲』の日本における所藏と流通について（伴）

更にこのテキストは初印本が持つ「繡刻〇〇記定本」と題する封面を一切持たず、また表装を全て改めている點等を見ると、やはり底本が汲古閣本だと思われぬ。これはむしろ様々なテキストを寄せ集め、表装を改め、汲古閣訂正刊「六十種曲」に装つたものと考ええる。故にこのテキストを汲古閣訂正刊とするのは誤りで、清刊とすべきだろう。

小論では扱わなかつたこの他の「六十種曲」はすべて上記五、國會本のように、定本が何である分ならず、同等の割合で各テキストが混在するものばかりだった。

三、早稻田大學所藏の六十種曲と汲古閣零本

現在早稻田大學には中央圖書館及び坪内博士記念演劇博物館に各一本ずつ『六十種曲』を所藏する。これらは共に出版者の記録を缺き、どの系統に屬するかはつきりしていなかつた。上記の通り特徴を確認した諸本に照らして分類を試みる。

早稻田大學所藏の漢籍については幾つかの漢籍目錄が作られているが、その中で、『早稻田大學圖書館所藏漢籍分類目錄』⁽¹⁴⁾は一九八五年までに早稻田大學中央圖書館で確認された漢籍が著録されている。その集部第五詞曲類の「六 曲選之屬」には三種の明傳奇を含む戯曲の選集が著録されるが、刊

本は『六十種曲』のみである。そこには

六十種曲 明・毛晉輯（明刊）（常熟毛氏汲古閣） 一二〇冊

へ十九—二六四〇

とあり、括弧をして明刊、常熟毛晉汲古閣とするが、これは明らかに實獲齋以降の版で、後修本である。

このテキストは「六十種曲」封面、「六十種曲總目」、「繡刻演劇」封面（首套く第六套）、弁語（首套く第五套）等刊記に繋がる全てを抜き、編次は通行本に同じ。各巻首題と目録の體例は、『還魂記』を巻首題上下巻共に雙行、目録題を「目録」に作る。『牡丹亭』を巻首題卷上雙行卷下單行に作り、目録題を上下巻共に「目次」に作る等、體裁は明らかに實獲齋本であるが、更に『水滸記』卷九に版木の缺損があり、初印本には缺損がないこと、同徳堂本に見られる錯誤顛倒の諸問題が見られないことから、これは實獲齋本であると判断される。

演博本は上掲『早稻田大學圖書館所藏漢籍分類目録』に著録されず、また演劇博物館が漢籍に關する専門の目録を持たないため、今回初めての調査になる。演博本は「六十種曲」封面、「繡刻演劇」封面（首套く第六套）、弁語（首套、第二套、第四套、第五套）を抜き、『春燕記』巻首に「題演劇三套弁語」のみを有する。編次は通行本に同じ。各巻巻首と目録の體例

は『還魂記』巻首題上下巻共に雙行、目録題を「目録」に作る。『還魂記』のみ表紙別装、そこに「遠／1185／161」の分類番號あり。⁽¹⁵⁾『牡丹亭』を巻首題卷上雙行卷下單行に作り、目録題を上下巻共に「目次」に作る。これらのうち巻首題、目録題の特徴は實獲齋本の特徴に同じ。また『焚香記』上下巻とも目録題を「目次」に作り、各本に缺丁、頁の顛倒が多い點とその箇所は同徳堂本の特徴と同一である。また同一の版面の比較においても演博本の刷りが最も悪く、框格の缺損なども諸本のうち最も後印と思われる同徳堂本に似る。また『霞箋記』上下巻を共に抜き、抄本を補配する。演博本のテキストは同徳堂本を底本として『還魂記』を零本で、『霞箋記』を抄本でそれぞれ補ったものであると判断される。

二つの早稻田大學所藏の『六十種曲』テキストは、五、國會本ほどではないが雑な編集で、封面や弁語等、収録された各戲曲を單獨で刊行する際に不要なものを多く缺いている點に共通の特徴を持ったため、流通するいずれかの段階で單行本として流通していた汲古閣刊本を寄せ集め、『六十種曲』を再構成した可能性がある。こうした様々な版を寄せ集めた『六十種曲』が多く存在することは、一方で、そうした再構成を助ける零本が大量に存在することが考えられる。その點につ

いて、中央圖書館に藏される明刊傳奇を検討し考察する。

『早稻田大學圖書館所藏漢籍分類目錄』の集部第五詞曲類「五 南北曲之屬」には三十一種の戯曲が著録され、『雜劇十段錦』を除く三十部が明代傳奇である。更に影印等の近代出版技術による複製を除くと十七種の傳奇があり、全て刊行者不明の明刊本となっているが、今回調査した結果、そのうち十二種が『六十種曲』の零本だった。十二種の『六十種曲』零本の著録を以下に掲げる。

- 一 玉簪記 二卷 明・高濂撰（明刊）二册 唐大 へ一
九―二六四九
- 二 浣紗記 二卷 明・梁辰魚撰（明刊）二册 唐大 へ
一九―二六四六
- 三 明珠記 二卷 明・陸采撰（明刊）二册 唐大 へ一
九―二六四八
- 四 紅梨記 二卷 明・徐復祚撰（明刊）唐大 へ一九―
二六四二
- 五 紫釵記 二卷 明・湯顯祖撰（明刊）二册 唐大 へ
一九―二六五〇
- 六 邯鄲記 二卷 明・湯顯祖撰（明刊）二册 唐大 へ
一九―二六五一

『六十種曲』の日本における所藏と流通について（件）

- 七 焚香記 二卷 明・王玉峯撰（明刊）二册 唐大 へ
一九―二六五二
 - 八 飛丸記 二卷 明・秋郊子撰（明刊）唐大 へ一九―
二六四三¹⁶
 - 九 精忠記 二卷 明・姚茂良撰（明刊）二册 唐大 へ
一九―二六四七
 - 十 東郭記 二卷 明・孫鍾齡撰（明刊）二册 唐大 へ
一九―二六五五
 - 十一 金雀記 二卷（明刊）二册 唐大 へ一九―二六五四
 - 十二 霞箋記 二卷（明刊）二册 唐大 へ一九―二六五三
- これらはそれぞれ別個の流通経路をたどって早稻田にやっ
てきたものと考えられるが、その中で四、『紅梨記』、八、『飛
丸記』は早稻田大學圖書館によって帙装され、共に收められ
ている。また、兩書とも同じ表装で装丁し直され、その上「槐
南詩料」（森槐南）、「鬢絲禪侶」、「窠莊館森川氏藏書記」（森川
竹磔¹⁷）等の藏書印を持つ點も共通している。この印記から、
このテキストは、東京専門學校が文學科を創設した當時、坪
内逍遙により漢文科講師として招聘された森槐南の舊藏書で
あることが分かる。槐南より弟子の森川竹磔を経て、早稻田
大學に收められたものだろう。表紙に槐南の印記が残ること

から、槐南の手許にある時期に既に表紙が改められていたことも分かる。また收藏日はそれぞれ昭和十年一月十五日（『紅梨記』）、同一月二十三日（『飛丸記』）であるため、舊藏者の死後早稻田大學が書肆より購入したものである。

この二種には共に極めて精確な槐南の朱點手批が付さされていて、槐南が他書によつてこのテキストを校訂していたことが分かる。

その他のテキストには刊記を判断する封面等や、舊藏者を示す藏書印等が見つからず、刊記やその流通の経路については判断が出来なかつた。今後テキスト比較等により、さらに調査を進めたい。

個別の版本の詳細についてはいまだ不明な部分が多いが、ここで注目したのは早稻田大學が所藏する明刊傳奇の大半が汲古閣本の零本だつた點である。これは古籍の市場に『六十種曲』の零本が多く存在していたことを示すが、更に、そうした零本が寄り集まつて再び『六十種曲』が作られたことをも窺わせるに足る。前節で論じた五、國會本などの出版者不明の『六十種曲』が作られた背景は、こうした零本が大量に存在する状況と密接に結びついていると考えるのが適當だろう。

四、まとめ

以上日本の各研究機關に藏される主な『六十種曲』のテキストと早稻田大學所藏の『六十種曲』テキスト等を調査した結果を報告した。その結果、近代以前の戯曲研究における明傳奇がある種の特殊な状況に置かれていたことが分かつた。

近代印刷術が一般化する以前の明傳奇の流通は、その大半を『六十種曲』とその零本が擔つていた。だが日本にもたらされた各種の『六十種曲』テキストは極めていい加減なものだつた。日本にこうした粗版の『六十種曲』が横行した理由は、『四十種傳奇』なる僭書がでつち上げられた例が示すように、いわば本國において利用價值の低くなつた漢籍を再利用する賣り主の動機が作用していること、また一方で『六十種曲』の相次ぐ再刊と、その度増えていく錯誤顛倒が、それを促進させていることが影響した。

早稻田大學に藏される『六十種曲』は、いずれも通行本と呼ばれる大量に印刷された『六十種曲』を底本にして、缺卷や缺葉をあるいは抄本で、あるいは別の『六十種曲』テキストから補つたものだつた。これは良い版を組み合わせることや、使える部分だけを流通させることが、最も容易かつ妥當

な利用方法であつたことを示す。こうした書籍を受け取つた日本人は、結果として、例えば森槐南舊藏書の例に見られるように、日本の中國戯曲研究者のもとに運ばれ、戯曲を研究するための貴重な資料になつた。彼らは『六十種曲』を入手すると、整理、校訂を行い、「讀めるテキスト」に整理する作業を重ね、その程度がよければ『六十種曲』として再構成され、そうでなければ、使える部分を取り出し明刊傳奇として流通させたのだろう。

こうした調査が示す日本の明代傳奇受容の實態について、最後に一つ觸れておきたい。現在關西大學圖書館は汲古閣刊本『水滸記』を所藏する。このテキストは江戸時代周防徳山藩に舊藏され、江戸の古書肆「待賈堂」主人達磨屋吾一を経て、明治期に早稻田で英獨文學を教授した文學者千葉掬香が手に入れ、昭和に入つて長澤規矩也の藏書に収まり關西大學圖書館の長澤文庫が所藏するに至つたものである。このテキストは本文左に日本語の逐語譯が付されている珍本で、山口大學棲息堂文庫所藏の徳山版第三代當主毛利元次（一六六八年〜一七一九年）舊藏『水滸記』摘譯稿本、演劇博物館所藏『水滸記』抄本と共に、明代傳奇の邦語譯の形成を知ることのできる貴重なテキストであるが、いつ、どこで、どのような経

緯を経て邦語譯を形成したか、よく分からなかつた。しかしこれまで論じた『六十種曲』が容易に零本となる状況、それが様々な経路を経て傳奇の廣汎な流通を促した状況を日本の明刊傳奇流通の背景とし、上述の『傳奇四十種』が毛利元次の舊藏書であつた點、江戸期における『水滸記』關連の版本が全て徳山毛利氏を経て流通している點を併せて考えると、まさしく『水滸記』（この時『六十種曲』完帙であつたか『水滸記』零本であつたかは依然として不明）傍譯本と『傳奇四十種』が元次の手にあり、ここが江戸期における明代傳奇流通の一つの結節點となつた可能性を示唆している。

毛利元次は、江戸期の著名な漢學者伊藤仁齋、東涯と交友を持つ文人藩主だつた。一方で書籍収集にも熱心で讀書所を兼ねた「棲息堂」を建て、膨大な漢籍を購求蒐書し、歴代の當主と共に集めた本は、善本を選び明治二十九年に當時の宮内省に献上されたもの一〇八八部二〇九〇二冊、献上から省かれ山口大學に捐贈したもの八二〇八冊とする規模を誇る¹⁸。彼は藩財政を困窮させるほど熱心に文藝に取り組み、元祿末から、やがて「不行跡」を咎められ改易される正徳六年まで、方々から有力な學者を集め藩の文教政策に力を注いだことも既に研究者の明らかなにする所である¹⁹。或いはこうした場で『水

『辭記』の譯文が討論されていたのかも知れず、今後本調査の成果を基に、徳山藩毛利氏に集まる人と戯曲作品についての調査を行いたい。

注

(1) 汲古閣刊行の傳奇の選集は當初『繡刻演劇十本』と稱され、『船載書目』においては『繡刻演劇』、また『演劇』などとも稱されるが、小論では便宜的に廣義に汲古閣刊本のそれら、及びその版木を基に刊行したものを『六十種曲』と呼び、特にその初印本を『六十種曲』初印本(初印本)と呼び、それ以外のテキストを總稱して『六十種曲』通行本(通行本)と呼ぶこととする。

『六十種曲』に關する研究はなお決して多いとは言えない状況にある。特に『繡刻演劇十本』がなぜ汲古閣から再刊される際に『六十種曲』とされたかについては、未だ定論を見ない。崇禎の初印以降明末の動亂によつて版木が焼失し、重印や補刻が難しい中新たに版木を作ったが、初印とは全く違うものになつてしまつたので名前を改めたという説、毛晉が死亡し汲古閣の事業を息子毛辰が受け継ぎ、息子の編刻した圖書に「六十種」と名付けたものが多かつたため(『宋六十名家詞』等)それに倣つたとする説等があるが、どれも状況からの推測の域を出ない。小論は同時代に『繡刻演劇』と稱する全く別の戯曲選集が大書肆富山房より刊行され、その重複を毛辰が嫌つた事もそ

の一因と考えるが、それも決定的な證據とはならない。

(2) しかし實際初印本を復元したテキストは二〇一〇年の段階では見あたらない。初めて『六十種曲』を排印印行した開明書店版『六十種曲』は初印本を元にテキストを校訂したとあるが、趙景深が「六十種曲的初印本」(『讀曲小記』、一九五九年、中華書局上海編輯所、第一二三頁〜一二五頁)において『玉合記』初印本と開明書店本のテキストとを比較し、初印本であることを否定している。小論が調査したところ、趙景深の指摘した缺漏、錯誤が實獲齋本に一致したことを付記する。その後出版されたいずれの排印本も初印本をそのまま排印している物はない。

(3) 『繡刻演劇十本』第一套から第五套までには「弁語(弁言)」とする序が残されている(版心題を「演劇序」とするためその序としての性質は明らかである。第六套の弁語は、現在、佚して傳わらない)。その署は閑世道人、得閑主人、觀靜道人、閑閑道人、思玄道人とするが、これを毛晉の自序とする説がある一方で、あるいは交遊のあつた陵濠初、馮夢龍、陸貽典などのものとする説もある(馬衍「毛晉與六十種曲」、『徐州師範大學學報』、徐州師範大學、一九九九年、第二二五頁)。毛晉は『六十種曲』に馮夢龍改定の『殺狗記』を収録し、徐日曦(昞)改定の『牡丹亭』を収録する(俞爲民「傳奇精華的滙集——《六十種曲》、《古典文學知識》、鳳凰出版社、一九九五年、第一〇六頁)から、その編集に交遊のある戯曲の専門家の協力を得ていたことは明らかである。

- (4) 蔣星煜『六十種曲標注』序——六十種曲的編刻與流傳(黃竹三等主編、『六十種曲標注』卷一所收、吉林人民出版社、二〇〇一年、第一〜二九頁)によると、吳曉鈴は一九四八年、北平『華北日報』に『現在「六十種曲」初印本小記』を發表し、當時の初印本收藏者の状況を調べ、傅惜華三十九種、吳曉鈴二十七種、鄭振鐸十八種、北京大學圖書館十四種、北平圖書館及びドイツのホフマン(Hofmann)各十種、鄭騫四種、趙景深三種、賀昌群二種、開明書店及び吳梅各一種の百二十九種が現存し、重複を併せると六十種中五十一種が現存する、とした。また吳曉鈴は一九九〇年に『六十種曲』點校者之自白(『華北學刊』、一九九〇年第一期)を發表し、中國解放後、鄭振鐸が文化部副部長に就任し、全國的な中國戲曲の調査を行い、一九五五年までに五十九種まで發見し、さらに吳曉鈴本人が残る一種を發見し、全ての初印本が發見された、とした。
- (5) 『六十種曲』所收の戲曲の作者については各研究者、各收藏機關によつて異なり、定論を見ない。今回は、基本的に初印本については吳曉鈴、鄭振鐸等の調査結果に基づき、通行本についても異説はあるが初印本の作者と合わせた。
- (6) 傅惜華著、中國戲曲研究院編、人民文學出版社出版、一九五九年。第五三五頁。
- (7) これらの書肆について、同徳堂は主に清朝に活動した書肆で、北京圖書館、首都圖書館等が封面に「同徳堂梓」とする『醒世因縁傳』重訂本を所藏して、實際の出版活動を確認できたが、實獲齋については『六十種曲』以外の刊行を確認できなかった。
- 『六十種曲』の日本における所藏と流通について(伴)
- きなかつた。吳曉鈴はこの實獲齋による刻本を汲古閣初印本と同版と考えていた、と吳書蔭氏は述べるが(吳曉鈴先生和『雙楯書屋』藏曲——《綏中吳氏抄本稿本戲曲叢刊》序(《綏中吳氏抄本稿本戲曲叢刊》第一册所收)、二〇〇四年、第五頁〜第六頁)、後述のごとく『六十種曲』は容易に所收の各戲曲を入れ替え出来るため、主張の根據として擧げる吳氏所收の實獲齋本に初印本五十二種を有する点はそのまま根據とし得ない。さらに日本所藏の實獲齋本が揃つて同じ位置に初印本との間に異同を有すること、注三に擧げた趙景深が明らかにした初印本と實獲齋本との相違、またそもそもな第二套に「實獲齋藏板」と刻したか、など、様々な箇所に疑問が残る。故に本稿では實獲齋と汲古閣との關係を待考とし、實獲齋本と初印本とを異なるテキストと考え、論を進める。
- (8) 同注四『六十種曲標注』序——六十種曲的編刻與流傳。
- (9) 大庭脩編著『船載書目』(關西大學東西學術研究所、一九七二年)により確認した。
- (10) 長澤規矩也「傳奇四十種と小説三十種」(『斯文』八の七、一九二六年)、同「再び傳奇四十種と船載書目との關係について」(『斯文』八の八、一九二六年)等。
- (11) 久保得二(天隨)『支那戲曲研究』、弘道館、一九二八年、「序」第三頁。
- (12) 『めざまし草』卷之二十所收、盛春堂、明治三十年(一八九七年)。
- (13) 『香港中文大學圖書館古籍善本書錄』に乾隆五十四年(一七

中國文學研究 第三十六期

八九年)に三多齋刻『五經體註大全』本『周易』四卷等を著録する。

(14) 早稻田大學圖書館編纂、早稻田大學圖書館出版、一九九一年。

(15) この番號について中央圖書館特別資料室の職員に伺ったところ、早稻田大學の書籍がカードで整理されていた時代に付されていたもので、いつの時代に受け入れたものかは分からないとの回答を得た。小論では「遠」は早稻田大學圖書館が漢籍の詞曲小説等に付されている大分類であること、これが中央圖書館から演劇博物館に移管される前に振られた番號であることを確認したが、編入を巡る事情やその時期など、詳細な事情は分からなかった。待考。

(16) 飛丸記撰者秋郊子は張景の別名。

(17) 明治二年(一八六九年)〜大正六年(一九一七年)。明治から大正にかけて活動した漢詩人。森槐南に學ぶ。

(18) 根ヶ山徹「山口大學棲息堂文庫漢籍目錄(稿)」(『山口大學文學會誌』六十卷、二〇一〇年、第七一頁)

(19) 渡邊憲司『近世大名文藝圈研究』(八木書店、一九九七年)
 「第二部 外様大名と文藝圈・毛利元次文藝圈考」(第二九二頁
 ～三二〇頁)